

平成28年度 上越市特別活動部 活動報告

部長 長谷川 敬子

1 研究主題

よりよい学級・学校生活をつくる学級活動
～ 話し合い活動でつくる楽しい学級 ～

2 研究の概要

上越市では、小中学校の県費負担教職員で上越市学校教育研究会を組織している。本部会は、その中の一つである。今年度は、学級での話し合い活動の充実に焦点を当て、会員個々の実践の積み重ねと秋の一斉研修を実施した。一斉研修では、学級会の授業参観、講話、情報交換を行い、学級づくりにおける教師の在り方について研修を深めた。

3 研究の実際

<秋の研修会の概要>

- ・期日 平成28年11月11日(金)
- ・授業公開 上越市立大手町小学校 2年2組



「にこにこいっぱい かがやき大作戦」

授業者 黒田 隆夫教諭

- ・小中混成グループ協議 (本授業と自分の実践について情報交換)
- ・講話 講師 高崎経済大学非常勤講師 橋本 定男 様

「よりよい学級会授業をつくる」

◆授業の概要

毎週の「さわやかタイム」をより楽しくするための話し合いである。今週は何点だった?の教師の問いかけに80~100の円グラフが並ぶ。A児は100点を付けた理由として「友達が先週とは別人みたいに楽しんでた。変わったなと思った。」と述べる。B児は100点でない理由に「ルールを守らない人がいて楽しくなかった」と発言する。B児は困ったことやルールを守ることの大切さを時には黒板の前に出て図を描きながら繰り返し主張する。そんなB児の強い主張をほかの子どもたちは真剣な表情で聞き、どうして守れなかったのか等次々に発言する。C児は「話を聞いて点数が減ってきた。にこにこじゃない人がいたから」と発言。最後に今日の話し合いの感想を書く。「もう一枚」とカードを取りに来る子どもが多数現れる。

◆講話の概要

教師は「自分が100点ならそれでいいのか」という収束をかけ、話し合いの質を深めていた。一人でも100点でなければ「にこにこいっぱい」にならないという価値を共有していた。

アクティブラーニングで求められる主体的であることと、対話的であることは、特別活動では既に前提である。深い活動を目指すことがカギとなる。それには「拡散」から「収束」の流れが重要になる。折り合いをつけたり、納得したりする経験も必要となる。他教科と異なり、泣いたり本音を言ったりして感情を出し、共感し合うことも特別活動ならではの場面である。

◆グループ協議から (一部紹介)

- ・B児の思いを聞く他の子の態度が立派だった。話すより聞くが重要。
- ・これまでの活動や思いが視覚化されているシートが効果的だ。
- ・中学生は本音で話しぶらい。今日の授業は本音で語っていた。学級づくりの大切さを痛感した。



4 成果と課題

授業(学級会)を参観し、それを講師から意味づけてもらったことが、自学級でもぜひ話し合いを行いたいという会員の意欲に結びついた。高学年の授業も見たいという声があがっている。学級会の議題設定から話し合いのルール、教師の出場など学級会授業について来年も学び合いたい。